

## 第2章（子どもの発達）に盛り込むことが考えられる事項（たたき台案）

### 1. 乳幼児期の発達の特性

保育の実施に当たっては、次に掲げる子どもの発達の特性や発達の過程を理解することが大切であること。

- 乳幼児期は子どもの心身の発達が著しく、生理的・身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人一人の個人差が大きいこと
- 子どもは、子どもを取り巻く環境（人、自然、事物、出来事など）に主体的に関わるにより成長・発達していくこと。
- 子どもは、身近な大人によって生命が守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定し人への信頼感が育ち、次第に自発的に身近な人、事物、出来事に興味や関心を持ち、働きかけるなど自我が芽生えること
- 子どもは、大人との信頼関係を基盤にして、子ども同士の関係を持つようになり、相互の関わりを通じて、知的、身体的な発達とともに情緒的、社会的、道徳的な発達が促されること
- 家庭及び保育所を通じた連続した生活全体の中で、子どもの発達過程に応じた必要な経験の積み重ねが大切であり、特に主体的な活動の中心である遊びを通して集団、協同的な関係が育ち、その中で個の成長も促されること
- 乳幼児期は生涯にわたる生きる力の基礎が培われ、特に身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性とともに好奇心や探求心が養われ、その後の学びの基礎になること

### 2. 発達の過程

- 子どもの発達過程は概ね次項に示す8つの区分（Ⅰ～Ⅷ）として捉えること。ただし、この区分は、同年齢の子どもの均一的な発達の基準ではなく、一人一人の子どもの発達過程として捉えるべきであること

#### Ⅰ 6か月未満児

母体内から外界への環境の激変に適応し、著しい発育・発達がみられる。特に視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、月齢が低いほど体重や身長が増加も大きい。泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、喃語などで自分の欲求を表現し、このことに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。生後、4か月くらいまでに首がすわり、その後寝返りをうつ、腹ばいなどにより全身の動きが活発になる。

## II 6か月から1歳3か月児

6か月を過ぎる頃から身近な人の顔がわかり、あやしてもらうととても喜ぶ一方、人見知りをするようになる。座る、はう、立つ、つたい歩きといった運動や姿勢の発達や自由に手を使えることにより、探索活動がさかんになる。身近な大人とのやりとりにより喃語も会話らしい抑揚がつくようになり、1歳前後には自分の意思や欲求を身振りなどで伝え、簡単な言葉が理解できるようになる。食事は離乳食から幼児食へ徐々に移行する。

## III 1歳3か月から2歳未満児

歩き始め、手を使い、言葉話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、投げる、つまむ、なぐり描きするなどの運動機能の発達や新しい行動の獲得により、自信を持ち、意欲を高めるなかで、友達との物の取り合いなども多くなる。大人の言うことが分かるようになり、自分の思いを親しい大人に伝えたいという欲求も高まり、指さし、片言などから1歳半前後には二語文を話し始める。

## IV 2歳児

歩く、走る、跳ぶなどの基本的運動機能が伸び、指先の機能が発達する。行動範囲が広がり、探索活動がさかんになる中、他の子どもと関わりをもつようになるが、欲求が妨げられるとかんしゃくを起し、反抗するなど自我が育つ。観察力も増し、盛んに模倣することで、物事間の共通性を見出し、言葉でのやりとりもさかんになる中で、大人と一緒に簡単なごっこ遊びができるようになる。

## V 3歳児

基礎的な運動能力が育ち、食事・排泄などもかなりの程度自立できるようになってくる。話し言葉の基礎ができて、さかんに質問するなど知識欲、理解力が高まる。自我がよりはっきりしてくるとともに、友達との関わりが多くなるが、実際にはまだ平行遊びが多い。大人の行動や経験したことをごっこ遊びに取り入れ再現したり、遊びの内容に象徴機能や観察力を発揮するなど発展性が見られ、遊びがかなりの時間持続する。

## VI 4歳児

全身のバランスをとる能力が発達し、体の動きが巧みになり、自然物など身近な環境に積極的に関わり、様々なものの特性を知り、その関わり方、遊び方を体得していく。自意識が芽生え、自分の思ったようにいかないといった葛藤を経験する。空想力、想像力も豊かになり、恐れのお気持ちや身近な人の気持ちが分かるようになるととも友達とのけんかが多くなる。一方、友達との会話を楽しみ、絵本や童話などを通しイメージを広げたり、目的をもって描いたり作ったりするようになる。

## **VII 5歳児**

基本的な生活習慣が確立し、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に集団遊びを楽しむ。仲間の存在が重要になり、共通のイメージをもって遊んだり、目的に向かってまとまって行動することが多くなり、その中で、きまりを守ることの必要性がわかる。またけんかを自分たちで解決しようとしたり、自分なりに考えて、判断したり、自分や他人を批判する力が生まれるとともに、他人の役に立つことを嬉しく感じるようになる。

## **VIII 6歳児**

手指の微細運動がすすみ、全身運動がなめらかになり、快活に跳び回るようになる。仲間の意思を大切にし、役割分担しながら共同遊びを行い、満足のいくまで取り組む。予想や見通しをたてて積極的に環境に関わり、様々な経験や知識を生かし、創意工夫を重ね遊びを発展させ、仲間とともに楽しむ。口が達者になり批判力が強くなるとともに、友達の前で我慢するようになるが、時々大人に甘えてくることもある。知識欲が増し、思考力、認識力も高まり、社会事象、自然事象などへの興味関心も深まる。